

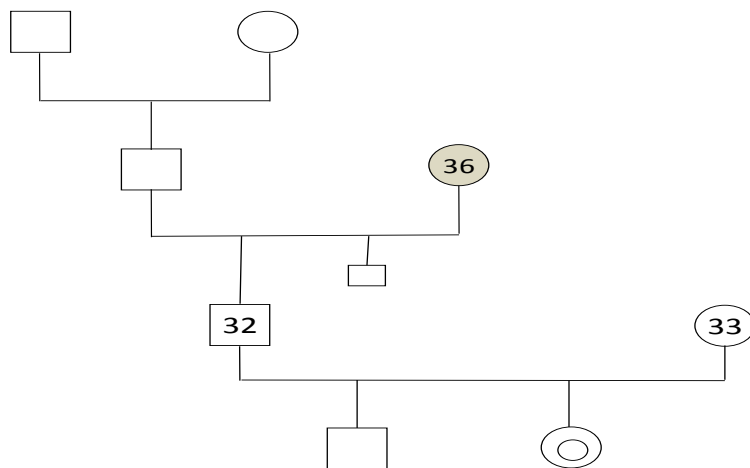
日本のジェノグラム

早樫 一男

8

人生最初のプレゼント: 名前

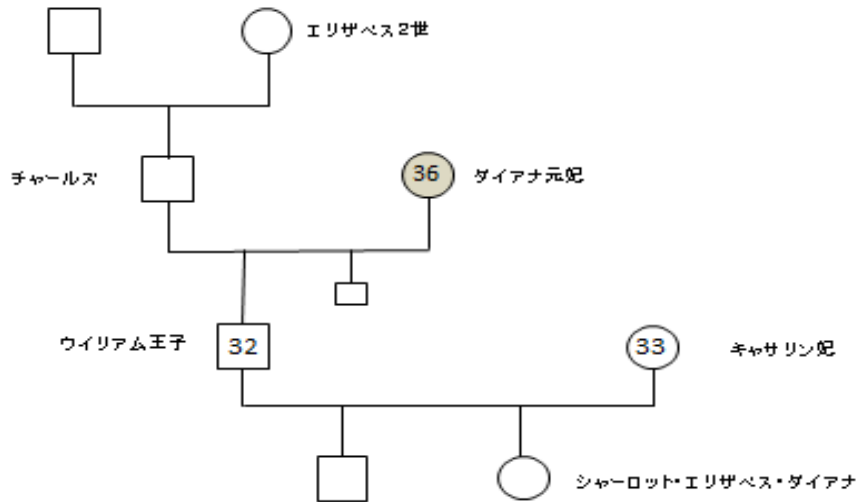
以下のジェノグラムは第二子の誕生と命名（名付け）に関わって、最近、話題になったご家族です。分かりますよね？



日本の場合、両親や祖父母の名前の「一字」を伝承するといったパターン、さらには、先祖代々伝わっている「一字」を使う家族があります。今回の場合は、生まれた子どもから見れば、父方祖母や曾祖母の名前がそのまま使われています。この点は日本との違いでしょうか。

いずれにせよ、名前の伝承は日本だけではないということを改めて感じた今回の話題でした。

英国王室(名前の伝承)



そして、名前（日本の場合は漢字の一文字）の伝承とともに、誕生時点から家族にとっての何らかの役割を期待されることとなります。子どもなりに親の思いを意識する場合もあれば、時には、その思いや期待が強すぎて、子どもがしんどくなるといったこともあるかもしれません。

○改めて、命名の話題から

私は「一男」です。私の両親にとっては最初の子でもでした。名付けたのは父方の祖母と聞いています。祖母にとっても初孫になりました。さらに言えば、母親は私の誕生の前に流産したことがあるとか…。私の場合は、何かにつけ、「長男」という役割を担うことになってしまいました。

いずれにせよ、漢数字の「一」が名前についているだけで、「最初の男の子」「一人目の男の子」「長男」であることなどがイメージされることとなります。

子どもの名前には家族のさまざまな思いが込められています。ある子は「健康に生まれたこと自体が親にとっては大きな喜び」だったという思いから、「歓喜」という名前が付けられました。「歓喜」というのは、ベートーベンの有名な交響曲第9番「歓喜の歌」で使われている漢字です。

さらに、命名のプロセスも家族によっていろいろです。それは、名前の決め方や決まり方のことです。そのエピソードを通して、家族のありようや家族の一面を垣間見ることができるのです。

ある家族の場合

彼女は事情があって、一人娘を連れて離婚しました。娘が3歳の頃でした。その後、紆余曲折を経て、娘が小学校に入学する前に再婚することになりました。縁があった男性にも離婚歴がありましたが、その男性には子どもはいませんでした。

お互いの再婚は夫婦関係を新たに築いていくという意味で大きなハードルに向かうことになります。二人はそのことを随分意識していたので、再婚を決めるまでに、何回も話し合いを重ね、時間をかけました。

次に、意識したのは男性と子どもとの関係です。おとな同士は納得したとしても、子どもを連れた再婚の場合、新しい親との関係づくりは大きな課題になります。いわゆる、義理の関係です。

一般的に、義理の関係が生じた場合、親と子、それぞれの家族メンバーが新しい人間関係の中で、これまでとは異なったストレスを感じても不思議ではありません。

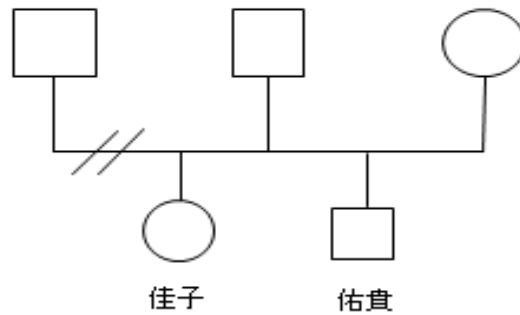
「最初から完璧にうまくいなくても不思議ではない…」「むしろ、あたりまえ…」と思う方が、家族お互いに力まずに済み、良い関係を育てていくことにつながると思います。

二人は再婚に際して、「焦らずに、時間をかけて、ゆっくりと親子の新しい関係を築いていこう」と心に決めました。

二人の間に新しい命が芽生えたのは、再婚後、3年ほどたった頃でした。夫婦はもちろんのこと、長女も新しい家族の誕生をととても楽しみにしました。その姿を見た両親はさらに喜びました。

夫婦が時間をかけて話し合ったのは子どもの名前のことでした。生まれてくる子どもも含めた二人の子どもに対して、「分け隔てない愛情を注ぎたい」という思いと、「きょうだい仲良く育ててもらいたい」という、両親の思いをなんとか子どもの名前に反映できないかと考えたのです。

夫婦が相談した結果、生まれてくる子どもの名前は「ゆうき (佑貴)」としました。そして、「ゆうき」の「ゆう」には「にんべん」に「右」の漢字を使うことにしたのです。というのは、長女の名前には「にんべん」が使われていたからです。「にんべん」に「土二つ」の「佳」に子どもの「子」でした。



「親の思いをなんとか子どもに伝えたい」「親の思いを子どもの名前に表したい」と考えた結果、長女の名前からヒントを得たのです。

二人の子どもに「にんべん」という共通した漢字を使うことによって、親としては、子ども達に対する思いをささやかな工夫で表したかったのです。

生まれてくる子どもにとって、名前は人生で最初の家族からのプレゼントです。また、誕生から始まって一生続く貴重なプレゼントではないかと思います。

(つづく)